

おばあちゃんあやまる

1958
作品ナンバー0019

文部省選定

戦後10年を過ぎて日本の伝染病は著しく減少したが、赤痢だけは少しも減らなかった。年間延べ600万人の保菌者がいて、そのうち届出患者が約10万人（厚生省実態調査）、しかも赤痢はその伝染経路が不明であることが多かった。この作品は、正しい伝染病の予防知識の普及を願って、赤痢菌がどのような経路で伝染していくかを劇形式で描いている。



おしげは一徹者。しかし、孫にはいいおばあちゃんである。息子の庫吉夫婦には2人の子供がいる。嫁のお千代は、かねてから薄暗い台所を改善したいと思っているが、おしげは、家の周囲に石垣を造っておきたいと考えて対立した。おしげは実家から石垣の借金をしてきたが、帰ると台所の流しが改造されているのを見て、「あの流しは病人の出る方角だぞ」と吐き捨てるようにいった。

それかあらぬか、おしげが腹をこわした。御札をのんだりして、これもあの流しのせいだと不機嫌である。さすがに庫吉夫婦も心配し、何とか医者に診てもらおうと竹中先生に相談した。一計を案じた先生がおしげを見舞うが、どこいとおしげは診察させなかった。せめておかゆをとの嫁の心尽くしも無駄で、おしげ1人で食事をするほどこじれてしまった。そのおしげが、「秋男、魚があるよ」と、可愛い孫に赤痢菌のついた魚を食べさせてしまった。おしげの腹下しは赤痢だったのだ。

秋男は発病した。秋男までもと、おしげは流しを打ち壊し、祈禱師を呼んだ。秋男は竹中先生に診てもらい、危ないところで持ちなおした。原因は川の水ではないかという庫吉に、先生はおばあちゃんだと断定した。菌型から推察しておしげが実家から病菌を持ってきたこと、それが秋男の口に入った経路を言ってきた。おしげは一言もなかった。

劇
35ミリ
白黒／30分

- 自主企画
- 協賛
三共株式会社

スタッフ

- 原案
後藤伍郎
- 製作
鈴木寿二郎
- 脚本
八田大八
- 演出
青山通春
島田 耕
- 撮影
山根重視

■ 出演

おしげ： 於島鈴子
庫吉： 江幡高志
お千代： 中沢すみえ
秋男： 青砥方比古
石屋： 福原秀雄
村の娘： 岡林敏子
竹中先生： 織本順吉
他